スラブ研究センターニュース　季刊　2008年夏号

SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS No. 114 August 2008

# 新センター長から

## 新しいスラブ研を目指して

岩下明裕

8月1日付で、センター長を務めることになりました。10ヵ月の在外研究にご配慮いただいたため、通例より数ヵ月遅れの就任となりましたが、帰国早々、様々な難題に直面し、翻弄される日々です。前センター長の就任のあいさつによれば、「センターは現在、全国共同利用施設ですので、全国のスラブ・ユーラシア専門家へのサービスに努め、またスラブ・ユーラシア専門家のご支持を賜ることが、その存続の条件」なのですが、2009年度にむけて、文科省の主導のもと、既存の全国共同利用施設の廃止、及び新しい「共同利用・共同研究拠点」の認定が予定されています。センターとしてもこれまでの全国共同利用施設と同様の位置づけを獲得するためには、新しい制度に応募しなければなりません。この位置づけを得られる保証はどこにもないということです。いわば、センターはいま存亡の岐路にたたされているといっても過言ではなく、全国のスラブ・ユーラシア研究の専門家のご支持をはじめ、内外の研究コミュニティからのご支援が火急に必要な状況に置かれています。

もうひとつのチャレンジは、21世紀COE後の対応です。2003年度から始まった21世紀COE事業は潤沢な予算をもたらし、センターの活動を質的に飛躍させることに成功し、関連する研究・教育コミュニティにその成果を還元できたと考えております。講座や叢書、外国語出版物のSESシリーズなどは広い分野で高い評価を受けました。内外での様々な研究活動の組織化や、若手研究者を含む助成なども多くの成果を得ることが出来ました。現在、21世紀COEの成果をどのように継承し、発展させるかという課題とともに、事業終了後に起こる財政的困難をどのように乗り切っていくかという難問が待ちかまえています。これまでのようにスラブ・ユーラシアに関わるほとんどの資料を無選別に購入し、次から次へと計画でき

るだけのシンポジウムやセミナーを内外で組織し、その成果を大量に刊行して配布するといった、「大量生産・大量消費」のよき時代は終わりました。これからは限られたリソースでどのように効率よくセンターの組織を運営し、またどの領域の活動を重点的に発展させていくかがテーマとなります。

このような変わり目の時期にスラブ研を預かるセンター長（director）に必要なことは、高みにたって指揮すること（direct）ではなく、同じ目線で組織をまとめ、これまで以上に研究・教育・行政などのさまざまなコミュニティと息をあわせながら、おつきあいを深めていくこと（manage）だと思います。私たちは今後、センターの日常生活や研究活動に新しいアイデアを導入し、実務上の工夫をしながらも、これまでセンターを通じてみなさまに培っていただいた蓄積や実績をもとに、決して動ずることなく、また臆することなく、一丸となってこれらの困難に立ち向かっていきたいと考えます。

夏休みとともにセンターは耐震建物改修が入り、しばらくの間、みなさまのご利用にご迷惑をおかけします。来年 4 月には新しいセンターの建物をご覧いただくことが出来ますが、建物ばかりではなくその活動の中身もまた大きくチェンジしたと、センターが評されるよう努力いたします。どうぞ、これからも、皆様のご指導をよろしくお願い申し上げます。［岩下］

# 研究の最前線

## ◆　2008 年度夏期国際シンポジウム開かれる　◆

講演をするハン氏

2008 年 6 月 25 日～ 27 日、スラブ研究センターは夏期国際シンポジウム「北東アジアの冷戦：新しい資料と観点」を主催し、北海道大学札幌キャンパスにおいて各セッションをおこないました。G8 北海道洞爺湖サミット期間中に予想された交通の混雑とセキュリティ上の混乱を避けるために、会議は通常よりも早めに開催されました。またセンターでは、全面的な改修工事が 2009 年 4 月まで続く予定で、センターの建物はすでに準備に入っていたことから、北海道大学学術交流会館とファカルティハウス「エンレイソウ」が当該イベントの開催場所となりました。

この国際会議は、日本学術振興会から主要な助成を受け、さらに北海道大学サステイナビリティ・ウィーク、東亜日報ホワジョン平和基金（ソウル）、ハーバード大学ロシア・ユーラシア研究デイヴィス・センター（マサチューセッツ）から補助的な助成を受けました。そして、冷戦史研究分野における最高峰の学者が、日本、ロシア、アメリカ、韓国、中国、EU、オーストラリアから招聘されました。国際的な冷戦史研究のためのプロジェクトやセンターのリーダーたちとともに、冷戦史研究に関する主要な二冊の雑誌の編集者も参加しました。

シンポジウムは、6 月 25 日、韓国の著名な外交官ハン・スンジュ大使による基調講演によっ

セッション4のようす

て開幕しました。ハン大使は、1993～1994年外務大臣を務め、さらに2003～2005年駐米韓国大使を務めた人物です。それに加えて大使は、高麗大学の元学長、現在はアジア政策研究機構の議長としての経験から、外交関係についての学術的な専門家の見解をよく理解されています。ハン大使の講演は、朝鮮半島の冷戦の過去と現在を結びつけることで、今回の国際会議の中心となる論点―北東アジアの冷戦は本当に終わったのか？―をただちに提起しました。ハン大使はまた、南北朝鮮を「冷戦最後のフロンティア」「過ぎ去ろうとしない局地化された冷戦」と特徴づけつつ、経験をもとに語りました。その際、1991年、1992年にモスクワと北京がそれぞれソウルを承認したことによって、北東アジアに質的に異なる状況がつくりだされたことが指摘されました。まさにこの状況によって、1993年から1994年の朝鮮半島における最初の核危機の脅威が、一時は不可避に見えた軍事行動なしに無害化したのです。質疑応答の時間は活気に満ちたもので、その場にいた学者はハン大使の答えの思慮深さと率直さの双方に深く感銘を受けました。東京大学名誉教授の和田春樹氏が、ロシア大統領ボリス・エリツィンから韓国大統領金泳三への贈り物として渡された朝鮮戦争の資料に関する質問をしたのですが、実はハン大使自身がその贈り物を届けるため、その資料をモスクワからソウルへ持ち帰ったということが判明したのです。

短いコーヒー・ブレイクの後、国際冷戦史を創造する運動の三人のリーダーたちが非常に有益な報告をおこないました。それらの報告はいずれも、包括的な冷戦史の世界構造を理解するためには、北東アジアを研究することが重要であることを強調するものでした。ジェームス・ハーシュバーグ氏は、ワシントンDCのウッドロー・ウィルソン国際研究センターで国際冷戦史プロジェクトを立ち上げたリーダーですが、彼は、アメリカ合衆国の外交史を国際冷戦史へと変えていくことについて説明をしました。法政大学の下斗米伸夫氏は、現在までになされた日本の冷戦史研究のさまざまな成功と失敗について、パワー・ポイントを使用した魅力的な報告をおこないました。ロンドン大学LSE校のオッド・アルネ・ウェスタッド氏は、1990年代初頭にロシア文書館が開放された頃のめまぐるしい日々から教訓を引き出し、他の資料、とくに北京の資料を機密扱いから外していくのに、これまでの資料をどう利用できるのかについて論じました。同じロンドン大学LSE校のセルゲイ・ラドチェンコ氏、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校の長谷川毅氏、ハーバード大学のグジェゴシ・エカート氏は、報告者たちの経験的な結論や演繹的な結論の間に存在するように思われる多様な矛盾をただちに指摘しました。活発な議論は、ちょうど58年前の1950年6月25日に始まった朝鮮戦争の悲劇を偲ぶために、ホワジョン平和基金が主催した特別な夕食会の間も続き、国際会議は、極めてよいスタートを切りました。

続く二日間の7つのセッションで、北東アジアの冷戦史に直接関係のある広い範囲の主題について、22本の論文に基づく報告がなされました。この各セッションの進行には、合計で120人の学者が参加しました。国際会議のプログラムは、すべての報告者、討論者、司会者を、彼らの所属と共に下記に掲載しましたので、ご覧下さい。北海道が世界的な問題を解決するためにG8の指導者たちの会議を開いたのとあわせて、北海道大学スラブ研究センターが、こうした国際的な諸問題が私たちの地域である北東アジアのコンテクストの中にどのように

して存在するに至ったのか、ということを調査する指導的な研究者たちの会議を主催したのは、まったく時宜にかなったことでした。［ウルフ］

## JUNE 25（編集部注：6 月 25 日は，会場が狭かったため，一部の専門家のみの参加となりました）

### KEYNOTE SPEECH

HAN Sungjoo (Professor Emeritus, Korea Univ.; Former Foreign Minister, Republic of Korea) "The Cold War in the Korean Peninsula"

### OPENING SESSION

James HERSHBERG (George Washington Univ.) "Some Moments in the Emergence of 'Cold War International History': With an Emphasis on Northeast Asia"

SHIMOTOMAI Nobuo (Hosei Univ.) "Researches and Viewpoints on the Cold War in Japan"

Odd Arne WESTAD (London School of Economics) "The Cold War and the International History of the Twentieth Century"

Chair: David WOLFF (SRC)

## JUNE 26

### SESSION 1 Leadership in the Cold War

David WOLFF (SRC) "Stalin's Northeast Asia and the Lost Peace of 1951"

James PERSON (Woodrow Wilson Center) "From Anti-Foreignism to Self-Reliance: The Evolution of North Korea's Juche Ideology, 1953-1963"

Vladislav ZUBOK (Temple Univ.) "Lost in the Triangle: The Far East and Japan in the Soviet-American Backchannel Talks, 1969-1972"

Discussant: SHIMOTOMAI Nobuo (Hosei Univ.) Chair: KIMURA Hiroshi (Takushoku Univ.)

### SESSION 2 Interdisciplinary Approaches

HA Yongchool (Univ. of Washington at Seattle) and MA Sangyoon (Catholic Univ. of Korea) "Pro-Market, Non-Market or Anti-Market?: The Cold War and South Korean Economic Development"

NAKACHI Mie (Univ. of Chicago) "Socialism, the Cold War Politics of Demography, and Northeast Asia"

Mark EDELE (Univ. of Western Australia) "The Cold War and Soviet Troop Reductions, 1945-1960"

Douglas STIFFLER (Juniata College) "Sino-Soviet Negotiations for the Establishment of the People's Univ. of China, 1949-50"

Discussant: Odd Arne WESTAD (London School of Economics) Chair: MOCHIZUKI Tetsuo (SRC)

### SESSION 3 End of the Cold War in Northeast Asia?

Sergey RADCHENKO (London School of Economics) "Secret Diplomacy of Soviet-South Korean Normalization"

NIU Jun (Beijing Univ.) "China 'Bids Farewell' to the Cold War: Deng Xiaoping and Normalization of Relations between China and the Soviet Union"

Lisbeth TARLOW (Harvard Univ.) "On the Rocks: The Gorbachev Team and Japan"

Discussant: KIM Sungho (Univ. of the Ryukyus) Chair: HAN Sungjoo

### SESSION 4 Soviet-Japanese Relations in the American Prism

YOKOTE Shinji (Keio Univ.) "Soviet Repatriation Policy Pushed Japan into the Cold War"

HASEGAWA Tsuyoshi (Univ. of California at Santa Barbara) "The United States, the Soviet Union and the Sino-Japanese Treaty of Peace and Friendship, 1977-1979"

Discussant: Vladislav ZUBOK Chair: IWASHITA Akihiro (SRC)

## JUNE 27

### SESSION 5 Socialist Alliances

SHEN Zhihua (China Eastern Normal Univ.) "The Soviet Air Force Goes Into Action: Relations within the Chinese-Soviet-Korean Alliance in the Early Stages of the Korean War"

WOO Seongji (Kyung Hee Univ.) "Inter-Korean Dialogue in the Early 1970s: Evidence from South Korean Interviews and Documents"

CHEN Jian (Cornell Univ.) "Limits of the 'Lips and Teeth' Alliance': Chinese-North Korean Relations in a Historical Perspective"

Discussant: ISHII Akira (Tokyo Univ., emeritus) Chair: HA Yongchool

SESSION 6 Comparative Alliances
Mark KRAMER (Harvard Univ.) “The Warsaw Pact and Soviet Policy in Northeast Asia, 1955-1964"
IZUMIKAWA Yasuhiro (Kobe College) “Alliance Commitments, Wedge Strategy, and Dynamic Alliance Interactions in Northeast Asia: A Comparative View”
Grzegorz EKIERT (Harvard Univ.) “Democracy, Party Systems, and Civil Societies in post-Cold War East Central Europe and East Asia”"
Discussant: ENDO Ken (Hokkaido Univ.) Chair: HAYASHI Tadayuki (Hokkaido Univ.)

SESSION 7 Northeast Asia, the Cold War and the 21st Century
Dmitry GORENBURG (Harvard Univ.) “Akula in the Water: The Role of the Russian Navy in East Asia after the Cold War”
KIM Hakjoon (Donga Ilbo) “How to Dismantle the Cold War Structure on the Korean Peninsula?: Debate among Conservatives and Progressives in South Korea and Its Implications for Relations among South Korea, North Korea and the United States”
WADA Haruki (Tokyo Univ.) “Hot Wars and the Cold War in Northeast Asia: Reappraisal for the Future”
Discussant: HASEGAWA Tsuyoshi Chair: HAKAMADA Shigeki (Aoyama Gakuin Univ.)

SESSION 8 General Discussion chaired by David WOLFF

## ◆ G8 サミット記念企画「ロシア青年使節団との対話」が開かれる ◆

5 月 22 日、G8 サミットに向けた企画の一環として、「環境が結ぶ隣国：ロシア青年使節団との対話」が北大学術交流会館において開催されました。これは、日露青年交流委員会が日本に招待したロシアの青年エリート（政治家、ジャーナリスト、極東地方指導者など）約 50 名と共に日本の環境研究の最先端の成果を聞くという、日露青年交流委員会・北大共催の企画でした。

会場のようす

北大の江淵直人教授が「オホーツク海の環境変動」について、東北大の斉藤元也教授が「東北地方における複合生態フィールド科学の構築」について、琉球大の中村將教授が「日本の亜熱帯沿岸域の環境と動物」について報告し、その後、日本語・ロシア語を交えた討論に移りました。特にロシア側から活発な質問があり、50 分の予定だった討論が 1 時間以上になりました。特に関心を引いたのは亜熱帯の環境問題を扱った中村報告で、珊瑚礁保護の具体的な取り組みやその報道のされ方（多くの日本人はこの問題を知っているのか？）について質問がありました。中村教授は、環境の他に現在おこなっている魚の性転換の研究について話をし、「魚だけでなく人間などにも応用できるか」との珍質問も出ました。江淵報告に対しても、オホーツクの環境の将来予測を尋ねる質問が出ました。

外務省の飯島泰雅氏が、「温暖化はロシアにとって悪くない、たとえばロシアの農業が盛んになる、寒いところに住めるようになるといった考えがロシア人の中にはあるが、どうか」という挑発的な質問をしました。江渕教授は、短期的にはそうかもしれないが、長期的にはそうではないだろうと回答しました。飯島氏の質問は狙い通りロシア側を刺激し、「環境問題は地球全体の問題だ」との発言が 2 人から相次いでなされ、会場（ロシア側）から拍手が起

質問をするロシア側の参加者

きました。サミットに関連して日本側の環境面での取り組みを尋ねる質問もあり、ロシア人参加者の環境に対する関心は大きいと感じられました。

捕鯨をどう考えるかとの質問があり、司会を務められた北大の上田宏教授が、数を把握するための調査捕鯨であること、日本の食文化であること、昔は欧米も油を取るために捕鯨をしていたことなどを指摘しました。

なお、この企画と夕方の懇親会との間には、ロシア側を数グループに分けた小樽・札幌のエクスカーションがおこなわれ、スラブ研究センターの若手研究者がガイドを務めました。総じて雰囲気は友好的で、懇親会でも、この会議を含めて日本側の hospitality に感謝する発言が相次ぎました。後日、外務省のロシア交流室よりスラブ研究センターに丁寧な礼状が届きました。［田畑・松里］

## ◆「北海道とロシア極東地域の持続可能な開発に向けた環境フォーラム」が開かれる◆

意見交換のようす

6 月 19 日に、「北海道とロシア極東地域の持続可能な開発に向けた環境フォーラム」が、北海道大学、北海道、北海道経済連合会、北海道開発局、北海道新聞社の主催でおこなわれました。会場は、北海道が札幌ドームで開催した「環境総合展 2008」の一角をお借りしました。事前に、北海道新聞にも広告を掲載していただきましたので、定員 100 名の出席者のうち、70 名が学外からの出席者でした。

このフォーラムでは、ロシア極東（沿海地方、ハバロフスク地方、サハリン州）と北海道から、自然科学と社会科学の研究者に加え、環境行政担当者が結集して、オホーツク海とその沿岸の環境について現状を確認し、今後の対策のための意見交換をおこないました。フォーラムは二部から成り、セッション 1 では、自然科学者が、アムール川の汚染、温暖化の影響を受けるオホーツク海の循環の変化、海洋資源、メタンハイドレードについて報告しました。アムール川の汚染については、ハバロフスクの水・生態学研究所から、リュボフィ・コンドラチェワ教授をお招きしました。セッション 2 では、上記のロシア極東地域から行政官各 1 名、北海道庁から 1 名をお招きし、行政と開発の立場から議論を進めました。社会科学者の立場としては、スラブ研究センターの劉旭氏（院生）が、極東の石油パイプライン建設に関わる環境問題について報告しました。

今回のフォーラムの意義は、最新の研究成果を持ち寄った研究者と地域の環境問題の実務

会場のようす

に携わる行政官との意見交換ができ、なおかつ、これらの情報を多くの一般の方々にも共有していただいた点にありました。とりわけ、日本の研究者の国際的な共同研究体制は、ロシア側の参加者にも、一般の方々にも深い印象を与えたようでした。ハバロフスク地方行政府からの参加者が、中国の黒龍江省とおこなっている地域レベルでの行政官・研究者の往来について報告した際には、日本人研究者が参画する可能性も模索されました。サハリン州からの参加者は、道の「環境宣言」が住民への動機付けを含んでいる点に高い関心を示しました。アムール川の汚染とそのサハリン島に沿った拡散によって、当該地域の先住民の生活が脅かされていることについては、対応の難しさが、ロシアの行政官の言葉ににじみ出ていました。

センターは、北海道大学の低温科学研究所と北見工業大学とともに、ロシア極東の研究機関と連携して、「環オホーツク環境研究ネットワークの構築」に取り組んでいますので、今後もこのような国際的･学際的な協議が続いていくと思います。しかし、今回のフォーラムでも、アムール川の汚染とオホーツク海の問題を扱うには中国の参加は不可欠との認識は、一般の参加者にも共有されていました。ロシア側は、「アムール川の汚染の 9 割は、中国の松花江の問題」と主張していますので、中国を議論に巻き込む別の問題設定を模索することが、今後の大きな課題です。［長縄］

## ◆　国境フォーラム II　「日本の国境地域について考える」が開かれる　◆

議論には地図が欠かせない

6 月 28 日に科研基盤研究（A）「ユーラシア秩序の新形成」の主催、日本島嶼学会の後援により、大会議室で国境フォーラム II「日本の国境地域について考える」が開かれました。これは 2007 年秋に、スラブ研究センターが日本島嶼学会との共催により沖縄・与那国島で開催した「国境フォーラム」（根室市長・与那国町長などが報告）の成果をもとに、国境問題に関心をよせる研究者間の議論を活性化させようとの意図で計画されたものです。第 1 部は日本各地の国境問題についてのパネルディスカッション、第 2 部はこの 10 月に「返還 40 周年記念事業」の一つとして計画されている小笠原での国境フォーラム III（根室・与那国・対馬の実務担当者が出席予定）の準備もかねたセミナーをおこないました。40 名程度の参加者があり、自由で活発な論議がおこなわれました。日本の国境問題を比較や連携の観点から議論する意義や与那

国でのフォーラムについては、『論座』12 月号（「『辺境』からみえる世界」：2007 年）などで少し展開しておりますが、今回のフォーラム II の成功を踏まえ、『国境・誰がこの線を引いたのか』（北大出版会）のようなかたちでの出版も考えております。日本も含む国境問題研究を今後とも積極的に推進していきます。なお、当日の報告は以下の通りです。

**第 1 部 10 時～ 12 時半　パネルディスカッション**

山田吉彦（東海大）「日本の国境の現状」
古川浩司（中京大）「国境自治体の挑戦」
黒岩幸子（岩手県立大）「千島と根室：定まらぬ国境に翻弄されて」
金成浩（琉球大）「オキナワ・パブリック・デイプロマシー」
コメンテーター：大城肇（琉球大）　司会：岩下明裕（センター）

**第 2 部　14 時～ 15 時半　特別セミナー「返還 40 周年：国境島嶼としての小笠原を考える」**

佐藤由紀（早稲田大）　山上博信（愛知工大）
コメンテーター：長嶋俊介（鹿児島大）　司会：田村慶子（北九州市立大）

10 月の小笠原集会については、以下のリンクをご参考ください。
http://east-urawa.com/jsis/conference/Ogasawara2008.htm［岩下］

## ◆　ITP フェローの派遣始まる　◆

第 1 期 ITP フェローに選抜された 4 名のうち、杉浦史和氏（GWU: ジョージ･ワシントン大学）、半谷史郎氏（ハーヴァード大学）は、それぞれ 6 月 10 日、6 月 19 日に離日しました。近く、体験談を送ってくれるでしょう。オックスフォード大学聖アントニー校に派遣される乗松亨平、平松潤奈両氏は、8 月中旬の出発に向けて準備中です。

なお、フェローの出発に先立って、デヴィッド・ウルフ教授がハーヴァード、GWU、オックスフォードのすべてを自ら訪問して、オフィス、滞在中の共同企画などの具体的問題を交渉しました。［松里］

## ◆　第 1 回英語論文執筆講習会開催される　◆

3 月の英語キャンプに続く ITP 事業の第 2 弾として、若手研究者を全国から招聘して、5 月 31 日から 6 月 1 日にかけて英語論文執筆講習会がおこなわれました。その時間割は次の通りです。

**5 月 31 日**

9:00-12:00　英文執筆講習会 “For Clarity and Grace”-I.
13:00-15:45　英文執筆講習会 “For Clarity and Grace”-II
16:00-18:00　セミナー “How to Get Published”-I
　　投稿体験談：松里公孝、久保慶一、安達祐子

**6 月 1 日**

9:00-12:00　英文執筆講習会 “For Clarity and Grace”-III
13:00-14:30　英文執筆講習会 “For Clarity and Grace”-IV
14:40-18:30　セミナー “How to Get Published”-II
　　ダイアン・P・コーエンカー教授（*Slavic Review* 前編集長）
　　テリー・コックス教授（*Europe-Asia Studies* 編集長）
　　討論

**コーエンカー・*Slavic Review* 前編集長の講演「どうすれば、すばらしい学術論文が書けるのか」はセンターホームページ http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/ に掲載中**

このうち、英文執筆講習会 “For Clarity and Grace” は、北大の元･現教員であるアンソニー･バックハウス教授とポール・ステイプルトン教授を講師とし、受講者自身が書いた論文を素

材として英語作文法と文体論を学ぶものでした。このため受講者には未校閲の原稿の事前提出が求められ、また個別指導にできるだけ近づけるために、授業は2グループに分かれておこなわれました。

実際の論文執筆と投稿の技術を学ぶ講習 "How to Get Published?" は2部に別れ、初日は、欧米への雑誌への投稿経験が相対的に多い松里、および若手から久保慶一、安達祐子両氏が報告者となり、投稿成功談、失敗談を自分の体験に基づいて語りました。

講習会のクライマックスは "How to Get Published?" の2日目で、*Slavic Review* の前編集長（1995-2005）ダイアン・P・コーエンカー・イリノイ大学教授（彼女への松里の敬愛の念については、センター・ニュース2005年冬号のエッセイ参照 http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/news/100/news100-fr.html）、*Europe-Asia Studies* 編集長のテリー・コックス・グラスゴー大学教授を講師として、日本からこうした欧米一流査読誌への投稿・掲載を抜本的に増やすための方策を検討しました。

両教授の講演は非常に対照的で、コーエンカー教授は、*Slavic Review* の経験に基づきつつも、学術論文とはいかにあるべきかのついての自説を縦横に展開したもので、「書く」ということに対する姿勢が英語圏ではこれほど厳しいのかということを改めて思い知らされました。これに対し、*Europe-Asia Studies* は、冷戦終了後の学術のグローバル化を推進し、特に旧共産圏やアジアのスラブ研究者の業績を国際化する上で手柄が大きかった雑誌です。この雑誌なしには、政治学に例をとればウラジーミル・ゲリマン、グリゴーリー・ゴロソフなどがこんにちほど知られていることはありえなかったし、日本では私、雲和広氏、大串敦氏などが恩恵を受けています。今回も、コックス教授が日本からの投稿をますます増やす狙いで来日したのは鮮明であり、あくまで *Europe-Asia Studies* の編集経験に基づいたフレンドリーな講演でした。たとえば、コーエンカー先生は、*Slavic Review* は若手研究者には書評を頼まないとおっしゃるのに、コックス教授は、書評は大学院生が一流ジャーナルに載る好適な入り口であると呼びかけるなどです。私は、コーエンカー先生と同じく、幅広い知識を要する書評はむしろ年配の研究者向けの仕事であると考えているので、*Europe-Asia Studies* の呼びかけはちょっと意外でした。

ところで *Europe-Asia Studies* は、スラブ研究以外も含む地域研究系の雑誌の中で9番目の「インパクト」を誇りながら、他方ではその原稿採択率（掲載数を投稿数で割った％）は50％、つまり一流誌としては例外的な高さです。コックス教授がこれを紹介すると、若手研究者の多くが心を動かされたようでした。ちなみに、*Slavic Review* の採択率は4分の1、*Acta Slavica Iaponica* でさえ3分の1です。つまり、採択率だけを見れば、*Acta Slavica Iaponica* よりも *Europe-Asia Studies* に通す方が易しいのです。もちろんそんなことはありえませんから、弱い執筆者がはじめから投稿しないように discourage する何か秘訣があるのだろうと私は質問したのですが、コックス教授は教えてくれませんでした。

こうした講演を受けた討論も、「英語力の不足はどの程度不利な要因になるのか」「日本人の投稿から学術文化の違いは感じられるか」「採択率の季節変動はあるか（!?）」といった、日本人が欧米の雑誌に投稿するに際して直面する主体的な問題を講師にぶつけるもので、日本の若手研究者の静かな闘志が感じられました。その後、居酒屋に場所を移して歓談となりましたが、日曜日の夜であったため居酒屋も鷹揚で時間制限がなく、ほとんど深夜まで受講者は講師を放しませんでした。その後、私はコックス教授とグラスゴーで会いましたが、日本の若手研究者からは非常に良い印象を受けたようです。私は、過密スケジュールで来日しながら若手と深夜まで付き合う一流誌編集者に、やはり雑誌の編集は無限の体力と好奇心がなければ務まらぬと感心した次第です。

こののちコックス、コーエンカー両教授は、青島陽子研究員のつきそいで京都大学での企

画へと転戦しました。このセミナーは、京都大学大学院人間・環境学研究科の三谷惠子教授のご尽力で実現したもので、同研究科、京都大学地域研究統合情報センター、スラブ研究センターの共催で、6月4日、「海学学術ジャーナルに掲載される英語論文を書くには？：問題の所在と対策」と題しておこなわれました。両教授に加え、人間・環境学研究科で英語教育に携わる藤田糸子先生にもご参加いただき、スラブ研究に限定することなく人文社会系学問一般の問題として語っていただきました。参加者は想定されていた30名をはるかに超え80名に達し、このようなセミナーを待ち望んでいたのは若手スラブ研究者だけではないことを示しました。

＊　＊　＊

論文集には、共通したコンセプトで結ばれた作品を並べることができるという長所があり、査読雑誌には、あれこれのテーマとの近接性にかかわらず、原稿そのものの優劣で掲載・不掲載が決まるという長所があります。しかしデジタル・ベースの時代には、この競争には歴史的決着がついたというのがコーエンカー先生の自論です。たしかに、こんにちほとんどの研究者は、カードでではなくネットで先行研究を検索し、電子ジャーナルから論文をダウンロードするのではないでしょうか。本号掲載のエッセイではエレガントに書いていますが、コーエンカー先生は歯に衣着せぬ人で、「論文集なんて、査読されたり落とされたりするのが嫌いな年配の研究者のために残っているに過ぎないのよ」と言っていました。彼女自身、*Slavic Review* の編集という激務をこなしながら、*American Historical Review* や *Past and Present* といったさらにプレステージの高い雑誌に投稿して通してきたわけですから、これは見上げたものです。

論文集が没落し、査読雑誌がもてはやされるのは、こんにちの評価システムにも原因があります。つまり、雑誌論文は、論文集論文よりもずっと「インパクト」が大きくなるのです。ICCEESの世界大会に提出されたペーパーをもとにした論文集は、論文集の中では最もプレステージが高いものに属します。にもかかわらず、2005年のベルリン大会については、2006年のICCEES執行委員会の時点でも若い研究者の投稿がほとんどなく、執行委員は頭を抱えました。就職やテニュア獲得を目指す若い研究者は、より評価の高い査読雑誌に載せることを志向するのです。ベルリン大会については、その後状況は改善しましたが、これに懲りた執行委員会は、2010年のストックホルム大会については雑誌と早めに交渉して、論文集ではなく雑誌の特集号を出してもらう方針です。

コンフェレンス・ペーパーを、手間がかかるわりには評価が低い論文集ではなく、査読雑誌の特集号として公刊しようというのは、前述の「歴史的決着」後のトレンドです。センターでも、来年3月に予定される環黒海跨境政治をテーマとする国際シンポジウムのペーパーは、ワシントンDCの *Demokratizatsiya* 誌と交渉して、特集号を出してもらうことにしました。従来は特集号をあまり組まなかった *Europe-Asia Studies* も、今後は特集号を出そうということで、コックス教授がアイデアを寄せるよう呼びかけていました。センターの国際シンポは最適のリソースになるでしょう。

しかし、査読雑誌が特集号を頻発するようになると、「テーマに関わりなく作品の優劣で掲載を決める」という査読雑誌本来の利点が失われてしまいます。論文集のプレステージが下がったため、査読雑誌が論文集的な機能を代行し始めたのです。すると、論文集論文的な水準のものを書いておいて、スコアだけは査読雑誌のスコアを稼ぐというズルも横行するようになります。研究者と評価者の間のいたちごっこにはきりがありません。特集号の乱発は、ただでさえ長い雑誌の行列をますます長くします。最近私は環黒海の正教外交について論文を書き、幸い、*Religion, State & Society* 誌に採択されたのですが、1年以上待たなければならないといわれました。今年の第3号、第4号はすでに満載で、来年の1、2号はあるテーマ

の合併特集号になることが決まっているからです。

査読雑誌には、*Slavic Review* のように一人の権威ある編集者が全号の内容に責任を負う独占型と、何人かの編集者がローテーションを組んで、それぞれが分担する号を決める型があります。その号については担当者の独裁ですが、雑誌全体としては競争的寡頭制が成立するわけです。*Demokratizatsiya* のように、複数の編集者の間で意見の相違や競争が起こるようにそもそも意図されている場合もありますし（確信犯的競争的寡頭制）、*Europe-Asia Studies* のように、結果的にそうなっている場合もあります。競争的寡頭制は、当落線上にある原稿に有利です。ある編集者（号）が受け入れなかった原稿を、別の編集者（号）が救済することもありうるからです。これは、採否決定の多元性だけではなく透明性という観点からも望ましいことです。私見に過ぎませんが、もし *Acta Slavica Iaponica* を年複数回刊行する財政的ゆとりが生まれたら（投稿数は、すでに年刊では到底収まりきれなくなっています）、競争的寡頭制を採用したらいいと思います。

こんにち、Taylor & Francis や Sage といった大手出版社が、まるで金太郎飴のように、ありとあらゆる学術雑誌を出版しています。学術出版の寡占化の結果、雑誌の編集方針への出版社側の意向がますます強く出るようになっています。たとえば、ほんの 10 年足らずの間に、*Europe-Asia Studies* は年 6 刊から 10 刊へと刊行数が急増しましたが、これは Taylor & Francis の意向だそうです。その結果、雑誌の水準が若干下がったことは、本来の編集主体であるグラスゴーの研究所にとっては由々しき事態ですが、「石」が増えたからといって「玉」の絶対数が減ったわけではなく、商業的にも不利益はありません。私も、*Religion, State & Society* に投稿して 1 年待たされるとわかっていたら、すぐに出してくれる *Europe-Asia Studies* に投稿していたでしょう。こうして雑誌の寡占化も進むのです。

*Acta Slavica Iaponica* も、どこか大手出版社と提携して出版することができれば、商品化することができ、「インパクト」も生まれるでしょう。しかし、その際は、英語のみの雑誌になることが当然要求されるでしょうし、何らかの形で自己差別化が求められるでしょう。つまり、あらゆる原稿を平等に受け付けることはできなくなるのです。これはおそらく、センターにとって受け入れられる条件ではないと思います。［松里］

## 英語論文執筆講習会に参加して

**杉浦史和（帝京大学、第１期ＩＴＰフェロー、ジョージ・ワシントン大学に派遣中）**

今回のセミナーは、英文を書くことに対する筆者の意識を変革するのに大いに役立った。率直に言って、これまでの私の書き方は、とにかく闇雲に日本語を英語に直すことにだけ焦点を当てていたので、文体やジャンル、さらに最も重要な読みやすさといった要素をまったく考慮してこなかったと思う。論旨展開についても日本語と英語の違いを十分には配慮してこなかった。また、投稿先のジャーナルの持つ特徴に対しても、十分な調査をしていなかった。少し落ち着いて考えてみれば、これらの点は投稿する際にクリアすべき当たり前のことであるが、それができていなかった自分を大いに反省したところである。また、数多くの若いそして異分野の研究者と知り合えたことも刺激になった。それぞれ目指すジャーナルは異なるが、お互いに切磋琢磨する機会を得られたことは今後の研究活動にも大いに資すると考えている。

北大のお二人の講師は非常に丁寧にお話してくださり、ともすれば関心を持てづらくなる他の人のペーパーへのコメントにも、主体的にかかわることができた。特に、参加者のペーパー

の誤りを正すコーナーは興味深かった。また先輩日本人研究者のお話はいづれも具体的で大変ためになった。編集経験のあるゲストのお話は、まだ投稿経験が乏しいので咀嚼するのに時間がかかると思うが、非常に刺激的だった。

自分自身のプランとしては、「ロシア企業の資本構成と企業統治の関係に関する考察」と題するペーパーを欧州比較経済学会（EACES）のモスクワ大会（2008 年 8 月）において発表し、*The European Journal of Comparative Economics* に投稿したいと思う。

## 平松潤奈（第 1 期 ITP フェロー、オックスフォード大学に派遣）

英語ライティング指導を受けるという今回の貴重な機会は、英語のみならず日本語論文についてもあまり規範を意識してこなかった私にとり、はじめて論文の作法を知るよい場となった。

1 日目には、英語論文の言葉遣いに関する講義があり、いくつかの点で自分が大きな誤解をしていたことがわかった（たとえば文語では、フランス語起源の語を選んで文章に格調を与えるべきなのだそうだが、私はこれまで、英語らしくしようと一生懸命、古英語・ドイツ語起源の口語を探していたのである）。2 日目には、すでに添削済みの個々人の英文をみなで検討する場が与えられた。冠詞のつけ方など、初歩的だがなかなか体得できない点に関して丁寧な解説や質疑があり、私もまだおぼろげながら理解が進んだように思う。また添削を受けた自分の英語論文には、大量の文法・表現上の過ちの指摘のほか、たくさんのクエスチョンマークがついていた。文法的に一応問題がなくとも、意味がよく伝わらない箇所が多いのだ。明快さを追求しつつ、他方では議論を単純化させることなく、というバランスを外国語においてどう実現するか、今後の課題を見つけたように感じる。

それぞれの日の後半には、英語雑誌に論文を掲載された日本人研究者の方々、そして英文雑誌の編集者の方々のお話を伺った。これまで私は、論文投稿の際に心がけるべき形式的な側面を軽視しがちであったが、外国語というハンディキャップを背負う以上、約束事や手続きにもっと敏感であるべきだと思うようになった。今回のセミナーは全体にとても充実しており（むしろあまりに詰まって追いつけないほどであった）、研究を進める上での刺激を与えられた。私は、3 月の英語キャンプに参加していなかったこともあってか、みなの積極的な発言に圧倒されてほとんど議論に加われなかったが、ライティングだけでなくスピーチや日常会話についても他の参加者の方々の姿勢から学ぶところが多かった。私にとって研究とは基本的に孤独な作業であり、明確な目標のもと多くの同年代の研究者とともに指導を受けるというこのたびの共同作業の機会は、たいへん新鮮であった。それが無駄にならないようにこれから実践していきたい。

現在、英語での報告・執筆を予定しているのは、スターリン文化論、そして博士論文のテーマであったショーロホフとソヴィエト文学体制との関係についての論考である。「ショーロホフ」というテーマは、現代におけるスターリン文化の後遺症という側面をもち、歴史的な研究対象としても重要性をもつのではないかと自分では考えているのだが、しかしそのイデオロギー性ゆえにロシアの言論界では自由に論じにくく、英語圏でも黙殺されている。ぜひ発表して他の研究者からの批判や意見を受けたい。報告は、BASEES や AAASS などを目指し、論文化できたならば、ロシア・スラヴ地域研究の総合誌 *Slavic Review* や *Russian Review* などに投稿してみたいが、おそらくハードルが非常に高いと見られるので、文学に特化した *Russian Literature* などにも挑戦してみる。いずれにしても、英語で書くということは潜在的な読者の数が増すことを意味するので、その点を自覚して内容的にも議論を向上させていきたい。

### 濱本真実（人間文化研究機構［東京大学拠点］研究員）

私はこれまで国際学会で英語で報告する機会を2回与えてもらったが、その報告を準備するのにも、報告後、出版用に文章をまとめるのにも、2度とも大変な苦労をしている。このような私にとっては、英語の雑誌に論文を投稿するなど、夢のまた夢だった。今回の英語ライティング・セミナーには、私の惨憺たる英語執筆能力の向上を期待して参加させていただいたのだが、思いがけなく、英語雑誌の編集者のお二人による、英文雑誌への投稿についての非常に具体的な解説を聞くことができて、英語での論文執筆、および、英語雑誌への投稿が、一気に身近なものになった（ような気がする）。特に、私が研究を始めた当初から慣れ親しんでいる *Slavic Review* の編集者を長く務められたコーエンカー氏の講演が、英語雑誌への投稿は別世界のお話である、という私の認識を大きく変えてくれた。

ライティングの指導においては、我々のペーパーから多くの例を取り出し、日本人が誤りやすい部分を一覧にして説明してもらった点（この資料の準備にかかった時間を考えると、講師の先生方に頭が下がる思いである）、また、書き言葉と話し言葉の区別について、フランス語起源の言葉は大概書き言葉だというわかりやすい指標を教えていただいた点が、私にとっては有益であった。自分のペーパーについて、文法的な誤りだけでなく、より明確に、優雅な文章になるよう修正してもらったことも、これまで受けてきたネイティヴチェックとは異なる、すばらしい経験だった。ただし、ペーパーを準備する期間は、もう少し長くとっていただきたかった。

現在、私の研究対象は、18世紀から19世紀のタタール商人の活動である。この研究を進めていく過程で大きな研究成果が得られたならば、*Central Eurasian Studies Society* 等の国際学会で成果を報告した上で、英語を許容する学術雑誌の中では19世紀以前のロシア史の論文を掲載することが比較的多い *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* に投稿できれば、と考えている。

### 島田智子（関西大学大学院）

普段まったりした関西の空気に浸って生活している身にとって、センターでの行事は常に心地よい緊張感を与えてくれる刺激剤のようなものです。とりわけ今回は、寸前まで雑事に取り込まれ殆ど何の準備もせずに参入してしまったため、素足にノースリーヴで新千歳空港に降り立った瞬間から、季節外れの寒風とレヴェルの高さに震え通しでした。

「ライティング・セミナー」と聞いていたものの、今回のセミナーでは「論文の書き方」だけではなく、コーエンカー、コックス両先生のご講義や、闘争の半生を彷彿させるような松里先生のご説話を通じて、「査読雑誌との付き合い方」から「論文投稿者のメンタリティ」に至るまで幅広く勉強することができました。2組に分かれての個人指導では、丁寧に添削していただいた提出原稿を自分の目で見直し間違いの性質を口頭発表することで、嫌というほど己が英文の悪癖を意識することができました。とはいえ、今回のセミナーで一番印象に残っているのは、長い間一流査読誌に関与されてきた両先生のご講義です。松里先生のご紹介どおり、ただのインテリゲンツィアには留まらない超インテリゲンツィアの知性が言葉の端々から伺われました。私は、個人指導でバックハウス先生に英文の redundancy を徹底的に直していただいたのですが、口頭発表でも冗長な表現に陥りがちでした。今回、一片の無駄な言葉もない両先生のご講義を伺って、「簡潔」の要を再認識しました。英語での講義に慣れていない私にすら不明な部分は一切なく、clarity のお手本のようなご講義でした。内容だけではなく、発表の姿勢も見習わせていただきたいと思います。

ただ内容が濃かっただけに、二日間という日数はあまりにも短すぎ、文字通りあっという間に過ぎてしまいました。せめてもう2，3日時間があって、わずかでも消化した知識を表現

する機会があれば、と思いました。こうした修練の場が恒例化するのであれば（ぜひそうなっていただきたいと思いますが）、5 日から 1 週間ほどの期間を設定されることが望ましいように思います。

今回先生方のお話をお聞きして、とにかくどんどん欧文で書いていくことが良い修行になるのではとの思いを強めました。私の場合、今回は提出期限までに論文を準備することができず、個人指導では博論のアウトラインを添削していただいたのですが、現在は出発前に書き始めていたウクライナの文科相ヴァカルチュークの改革理念に関する論考 The Vakarchuk Reform in the Historical Context: Ukrainian 'Sound' Nationalism or a New Attempt to Galicianize を執筆中です。今秋から、研究奨学生としてウクライナのリヴィウに滞在することになっており、このテーマに関していくつかインタヴューのアポもとれましたので、あちらでの進行をみながら国際学会等での発表を具体的に考えていきたいと思っております。投稿先については、セミナー後、先輩諸氏からいくつかアドヴァイスをいただきまして、現在執筆中の論文のテーマがウクライナの現代政治と歴史思想の双方に関わっていることから、学際的な論考に好意的な *Journal of Ukrainian Studies* を考えています。

◆ 公開講座 ◆

# 現代ロシアをめぐる7つの問い

## が開かれる

問 6　大須賀史和氏の講義

2008 年度のスラブ研究センター公開講座は、5 月 12 日から 6 月 2 日まで、7 回にわたっておこなわれました。今回のテーマは経済発展と政治的安定を背景に存在感を増しているロシア連邦の社会・文化事情。国家の発展ぶりは、はたして国民の生活にどのような影響を与えているか？　総じて現代ロシアで、人々はどんな風に働き、何を考え、どんな関心や悩みや目標をもって生活しているか？　そんな関心に基づいて、今のロシアを人々の暮らしの目線から捉えようという企画で、講師陣にも経済、政治、社会、スポーツ、思想、映画、文学と、多方面の専門家をそろえました。北海道サミット前というタイミングも手伝ってか、86 人の受講生の参加を得る盛況ぶりで、各講義の後には活発な質問が出されました。講座の結果は、後日インターネット版雑誌『しゃりばり』に掲載される予定です。プログラムは以下のとおり。［望月］

【5 月 12 日（月）】講師：田畑伸一郎（センター）

**問 1**：ロシアは「普通の先進国」になれるか？（ロシア経済の方向性を考える）

【5 月 16 日（金）】講師：皆川修吾（愛知淑徳大）

**問 2**：メドヴェージェフとは誰か？（ポスト・プーチンの政治を語る）

【5 月 19 日（月）】講師：大平陽一（天理大）

**問 3**：ロシア・サッカーはどこへ行くか？（スポーツから社会を見る）

【5 月 23 日（金）】講師：扇千恵（同志社大）

**問 4**：ロシアではどんな映画が人気を呼んでいるか？（映画から世相を見る）

【5 月 26 日（月）】講師：大津定美（大阪産業大）
**問 5**：ロシアは誰に住みよいか？（社会生活・格差問題を考える）
【5 月 30 日（金）】講師：大須賀史和（横浜国大）
**問 6**：ロシア知識人は何を考えているのか？（言論･思想界の状況を語る）
【6 月 2 日（月）】 講師：望月哲男（センター）
**問 7**：トルストイは「復活」するか？（文学から社会を見る）

## ◆ 2009 年度外国人特任教授決定 ◆

2009 年度における外国人特任教授の審査がおこなわれ、66 人の応募者の中から、以下の 6 名の正候補者が、過日の協議員会で承認されました。なお、今回から 5 ヵ月間の滞在枠を設けたこと、また、審査の過程で、提案されたプロジェクトが優れていること等から正候補者を 6 名としました。各人の滞在期間は 3 ヵ月から 6 ヵ月です。なお、宿舎の確保の関係から、同時に滞在する特任教授は 3 名を限度としています。［荒井］

**アバシン、セルゲイ・ニコラエヴィチ** (Abashin, Sergey Nikolayevich)
所属・現職：ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所上級研究員
研究テーマ：ロシア･ソヴィエト統治下におけるウズベク人のコミュニティー「オショバ」
予定滞在期間：2009 年 6 月 1 日～ 10 月 31 日（5 ヵ月）

**ダニレンコ、アンドリイ**（Danylenko, Andriy）
所属・現職：ペース大学現代言語文化学部講師
研究テーマ：ロシア・オーストリア統治下のウクライナにおける聖書：言語と言語政策
予定滞在期間：2009 年 6 月 1 日～ 8 月 31 日（3 ヵ月）

**フィンケ、マイケル・カール**（Finke, Michael Carl）
所属・現職：イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校スラブ言語・文学部教授
研究テーマ：三人のチェーホフ（アントン・チェーホフとその兄弟）
予定滞在期間：2009 年 12 月 15 日～ 2010 年 3 月 31 日（3 ヵ月半）

**ジェンティス、アンドリュー・アーマンド**（Gentes, Andrew Armand）
所属・現職：クイーンズランド大学歴史･哲学・宗教学・古典学部講師
研究テーマ：サハリンの流刑植民地について
予定滞在期間：2009 年 9 月 2 日～ 2010 年 2 月 28 日（6 ヵ月）

**コウォジェイチク、ダリウス・ウォジミエルス**（Kołodziejczyk, Dariusz Włodzimierz）
所属・現職：ワルシャワ大学歴史学部准教授
研究テーマ：出会いと接触の場としての黒海北部
予定滞在期間：2009 年 6 月 1 日～ 2009 年 11 月 30 日（6 ヵ月）

**ヴォルコフ、ヴァジム**（Volkov, Vadim）
所属・現職：サンクトペテルブルグ欧州大学政治･社会学部教授
研究テーマ：2000 年以降のロシアにおける国家形成
予定滞在期間：2009 年 12 月 1 日～ 2010 年 3 月 31 日（4 ヵ月）

## ◆ 2008 年度鈴川・中村基金奨励研究員 ◆

13 名の応募があり、以下の 4 名の方が採用されました。以下、五十音順。センターの図書室が仮住まいに移転しましたので、大変ご不便があろうかと存じます。詳細は、本センター

ニュースの「図書室だより」をご覧ください。［長縄］

| 採用決定者・所属 | 専攻分野・テーマ | 希望滞在期間 | ホスト教員 |
|---|---|---|---|
| 粕谷（かすや）　典子（のりこ）<br>早稲田大学大学院文学研究科 | 19 世紀ロシア文学、イヴァン・トゥルゲーネフの小説技法 | 2008 年<br>9 月 11 ～ 19 日 | 望月 |
| 〆木（しめき）　裕子（ゆうこ）<br>大阪大学大学院言語文化研究科 | 社会言語学、ウクライナにおける言語調査および関連資料における「母語」の扱いについて | 2008 年<br>9 月 1 ～ 20 日 | 野町 |
| 巽（たつみ）　由樹子（ゆきこ）<br>東京大学大学院人文社会系研究科 | 近代ロシアの絵入り雑誌と読者 | 2008 年<br>12 月 8 ～ 23 日 | 松里 |
| 渡辺（わたなべ）　圭（けい）<br>千葉大学大学院社会文化科学研究科／国立国会図書館支部図書館・協力課 | ロシア教会史、ロシア宗教思想史、ロシア正教会の神学の形成に対する「静寂主義」の思想の影響 | 2009 年<br>2 月 1 ～ 15 日 | 長縄 |

## ◆　グルザト・コベノヴァ氏の滞在　◆

カザフスタンのアクトベ教育大学歴史学部のグルザト・コベノヴァ（Gulzat Kobenova）氏が、7 月 15 日から 24 日までセンターに滞在しました。これはカザフスタンで優秀な大学教員に与えられる在外研修の経費を利用したものです。ちょうどセンターの引越し期間に当たってしまいましたが、気鋭の研究者であるコベノヴァさんは、ソ連時代のカザフスタンにおける石油産業政策史に関する報告をし、北大図書館で資料収集をおこなうなど、精力的に活動されました。［宇山］

## ◆　専任研究員セミナー　◆

ニュース前号以降、次の専任研究員セミナーが開かれました。

4 月 17 日：**山村理人**「ウクライナ農業：ポストソ連期の構造変動と政策展開」
センター外コメンテータ：山崎亮一（酪農学園大）

5 月 7 日：**松里公孝** “Inter-Orthodoxy Relations and Trans-border Minorities around Unrecognized Abkhazia and Transnistria” センター外コメンテータ：井上まどか（清泉女子大）

山村報告は，2006 年度に実施されたプロジェクトの報告書用に書かれたもので、ウクライナ農業の 90 年代以降の動向や問題点が包括的にまとめられたものでした。様々な論点についてより深みのある分析を求めるコメントが多く出されたように思われました。［田畑］

松里報告は、昨年の AAASS 年次大会で報告したペーパーに、2 月のグルジア出張の成果を加味して完成したもので、*Religion, State & Society* での掲載が決まっているものでした。非承認国家であるアブハジアとプリドニエストルがたまたま正教会の縄張り争いの対象であること、また、モルドヴァ人、メグレリ人という典型的跨境民族が住んでいることに注目して、環黒海広域政治の一環として、当該地を見る試みです。井上氏は、宗教学の立場からコメントしました。議場からは、論点を欲張りすぎて構成がごちゃごちゃしているという批判がなされました。［松里］

## ◆　研究会活動　◆

ニュース 113 号以降の北海道スラブ研究会、センターセミナー、及び昼食懇談会の活動は

以下の通りです。［大須賀］

5 月26 日 **F. アリアス=キング**（『デモクラチザーツィヤ』誌、米国）“Orange People: A Brief History of Transnational Democracy-Activism Networks in East-Central Europe Past and Present”（センターセミナー）

6 月16 日 **野町素己**（センター）「多言語社会と単一言語社会の間で : 旧ユーゴスラヴィア諸国における今日の言語状況について」（北海道スラブ研究会）

6 月28 日 国境フォーラム II「日本の国境地域について考える」 **山田吉彦**（東海大）「日本の国境の現状」; **古川浩司**（中京大）「国境自治体の挑戦」; **黒岩幸子**（岩手県大）「千島と根室：定まらぬ国境に翻弄されて」; **金成浩**（琉球大）「オキナワ・パブリック・デイプロマシー」; **佐藤由紀**（早稲田大）、**山上博信**（愛知工大）「返還 40 周年：国境島嶼としての小笠原を考える」

7 月 1 日 **P. ランシマポーン**（タイ外務省）“Russia as an Aspiring Great Power in East Asia: Perceptions and Policies from Yeltsin to Putin”（センターセミナー）

7 月 4 日 **岩下明裕**（センター）「ブルッキングスで考えたこと」（昼食懇談会）

7 月17 日 **G. コベノヴァ**（アクトベ教育大、カザフスタン）「カザフスタンにおける石油産業発展のためのソヴェト国家の政策（1917 ～ 1990 年）」（センターセミナー）

7 月26 日 スラブ世界の中のロシア、ロシアの中のスラブ世界（近現代のロシアとスラブ圏の相互関係、文化接触、表象）研究会 **菱川邦俊**（創価大）「ブルガリア文語形成におけるロシア語の役割（研究史概観）」; **小椋彩**（早稲田大）「『若きポーランド』派とロシア」; **越野剛**（北大）「ファデイ・ブルガーリンをベラルーシ文学に位置づける試みについて」; **M. シュカロフスキー**（ペテルブルグ中央国家文書館／センター）「スターリニズムと教会（ロシア語）」

# スラブと私を結ぶ運命の 1 冊

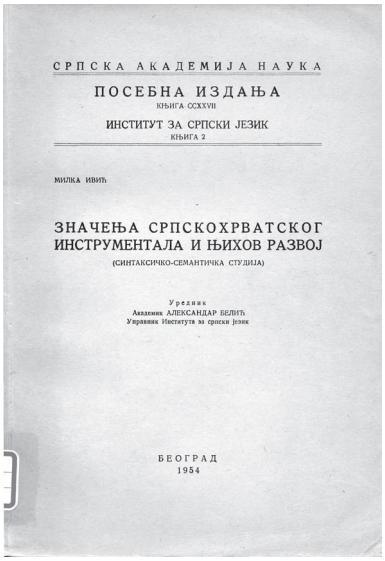
**野町素己（センター）**

私が初めてスラブ研究センターのことを知ったのは、鈴川基金奨励研究員に応募するときだったと思う。ただ、当時スラブ語学を専門に決めていた私は、その専門家がいないセンターには関心がなかった。

しかし、東大大学院の先輩で、奨励研究員に以前採用された方に「北大は貴重な資料が充実しているし、スラ研では、学問分野にかかわらず本物の学術的な雰囲気が味わえる貴重な機会だから、ダメもとで応募してみたら」と勧められ、奨励研究員に応募することにした。そこで、まず北大図書館にはどんな資料があるかと検索してみたら、当時東大の図書館には無かったミルカ・イビッチ教授の『セルビアクロアチア語の具格の意味とその発達』（1954 年ベオグラード刊。以後『具格』と省略する）が蔵書されていることがわかったから、応募書類には「このイビッチ教授の著書は、自分の研究にとって恐らく非常に重要な資料であるが、日本では北大図書館にしかないので、奨励研究員に採用されたら、ぜひその本を使って研究を進めたい」と書いたように記憶している。

幸いにして採用された私は、北大に着いたその日すぐにこの本を借り出し、コピーして少しずつ読み始めた。セルビア語のテクストを読むことも、本の内容も自分にはずいぶん難儀だったように思う。

なんとか読了したが、数々の疑問が残った。誰に質問したらよいのかわからないので、当

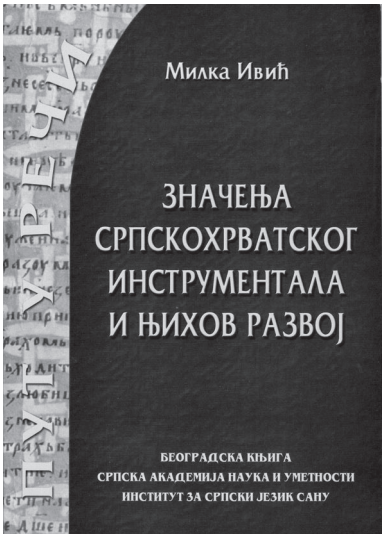

СРПСКА АКАДЕМИЈА НАУКА
ПОСЕБНА ИЗДАЊА
КЊИГА CCXXVII
ИНСТИТУТ ЗА СРПСКИ ЈЕЗИК
КЊИГА 2

МИЛКА ИВИЋ

ЗНАЧЕЊА СРПСКОХРВАТСКОГ ИНСТРУМЕНТАЛА И ЊИХОВ РАЗВОЈ
(СИНТАКСИЧКО-СЕМАНТИЧКА СТУДИЈА)

Уредник
Академик АЛЕКСАНДАР БЕЛИЋ
Управник Института за српски језик

БЕОГРАД
1954




**イビッチ教授の『具格』初版（上）と再版（下）の表紙**

時指導教官であった米重文樹教授に伺うと、「著者ご本人が最もよくご存知なのではないか」と言われたので、イビッチ教授に直接質問したく思い、自己紹介の代わりに自分の論文のコピーを添え、教授宛の手紙をセルビア科学芸術アカデミーに送った。イビッチ教授は世界的な言語学者であるから、それこそ「ダメもと」で手紙をお送りしたのだが、意外なことに、教授はすぐにお返事を下さった。論文に関するコメントや回答は無論だが、幅広くスラブ語学を学びたいのならば、教授の愛弟子であり、やはり高名なスラブ語学者であるプレドラグ・ピペル教授の指導を受けることも勧めて下さった。その後程なくして、ピペル教授からご連絡をいただいた。「9月にベオグラードで学会があり、それに合わせてセルビアに来られるなら、そこでお話しましょう」という旨のEメールを下さったので、9月にセルビアに行くことに決めた。

9月、私はモスクワ経由でベオグラードに向かった。モスクワに立ち寄ったのは、1997年に他界したスラブ語学の大家サムイル・ベルンシュテイン教授の膨大な蔵書が売りに出されていて、それを一目覗いて見ようと思ったからである。蔵書の売り場となっていた故人のアパートに立ち寄ると、既に連絡してあった遺族のカルーギン氏が迎え入れて下さった。ベルンシュテイン教授の著作は東大の図書館にもあり、それを独学で読んだこと、教授のブルガリア語辞典を使ってブルガリア語をかじったこと、自分はセルビア語にも関心があるが、教授はオデッサ時代にセルビア文学も教えてらしたことを聞いたことがあるなどとお話しすると、氏は本棚から何冊か本を出して「どうぞ思い出にお持ちなさい」と言って、それを下さった。その中の1冊に、上述の『具格』があった。しかもイビッチ教授からベルンシュテイン教授への献辞もある。ベルンシュテイン教授が1958年に編纂した『スラブ諸語の具格』という本には、イビッチ教授の著作からの引用が非常に多くあったのを思い出したので、飛行機の中でページを捲ってみると、思った通り、ベルンシュテイン教授の書き込み、また異なる筆跡のメモ — 恐らくそれを借りて読んだ弟子の書き込みであろう — があり、なかなか興味深かった。ベオグラードでピペル教授にお目にかかったら、この本はやはりイビッチ教授にお渡しいただこうと思い、俄かに出来たイビッチ教授への意外なお土産に私は喜んだ。

翌日、学会会場でまだお目にかかったことのないピペル教授を見つけるのは困難であったが、ピペル教授は唯一のアジア人である私を簡単に見つけてくださった。ピペル教授にご挨拶した後、すぐにお互いの関心分野などについて話をした。翌日も教授との面会をお願いしようとご予定をお伺いしたところ、「明日はイビッチ教授が科学芸術アカデミーであなたをお待ちですから、午前9時に大学で待ち合わせして、それからアカデミーに行って一緒にお茶でも飲みしょう。」と言われた。前述のベルンシュテイン教授文庫の1冊をイビッチ教授に

お渡しするようにお願いするつもりであったから、直接イビッチ教授にお目にかかれることに驚いたが、同時にとても嬉しく思った。

左：野町、中：イビッチ教授、右：ピペル教授

次の日、ピペル教授は時間通りに大学にいらして、それからミハイロ公通りのアカデミーにご一緒した。アカデミーの重厚な扉を押して中に入ると、赤い絨毯が続いている。左手には歴代アカデミー長の名が刻まれている。そこにはイビッチ教授の恩師で、旧ユーゴスラヴィア随一の言語学者アレクサンダル・ベーリッチ教授の名が一際輝いて見える。赤絨毯を進み階段を上ると、アカデミー会員専用の喫茶室がある。一番奥のテーブルでイビッチ教授はお茶を飲んでいらした。教授は、ピペル教授と私を見つけると、微笑みながらお迎えくださった。緊張から声を上擦らせながら、これまで教授の著書をいくつも読んだこと、中でも『具格』と『言語学の流れ』は自分にとても大きな刺激を与えたことを、現物をお見せしながらお話しすると、教授はそれに満足されたご様子であった。話題は、イビッチ教授が 1968 年に東京言語研究所の招待で講演会をされたときの思い出から始まったが、次第に話題は私が質問したかった言語学から逸れ、ご自分のお孫さんが私と同じくらいの年齢であることなど、むしろ雑談が中心になった。そのときの会話は、教授はセルビア語で、私はロシア語だったように記憶している。

ひとしきりお話になった後、イビッチ教授は「もうすぐ会議があるから」とおっしゃって席を立たれようとしたので、私はベルンシュテイン教授の蔵書のお話をして、件の本を差し出すと「この本はあなたが大切にしてください。ベルンシュテイン教授は大変立派なスラブ学者でした。あなたは『日本のベルンシュテイン』を目指しなさい。」と言われた。

その様子を見ていたピペル教授は「野町さんのために『言語学の流れ』に、記念に一言書いていただけますか」とイビッチ教授に伺うと、教授は「もちろん」とおっしゃり「親しき同僚の野町素己さんへ。私たちの出会い、スラブ語学についてお話したことの思い出に」と書いて下さった。最後に、イビッチ教授は、ピペル教授の指導で幅広くスラブ語学に取り組むよう、改めて勧めて下さった。こうして、私はピペル教授の薫陶を受け、本格的なスラブ語研究の道に入ることになったのである。鈴川基金奨励研究員に応募して、北大で 1 冊の本と出会ったことで、自分の人生が大きく動いたのだと今改めて思う。

尚、イビッチ教授の『具格』には、もう一つのエピソードがある。

2004 年の春、ワルシャワ大学に在籍していた私は、南・西スラブ学研究所にて、著名なスラブ語学者であるブオジミェシュ・ピャンカ教授のスラブ語比較文法論の講義を聴講していた。ピャンカ教授はマケドニア語とセルビア語の統語構造を比較しながら、イビッチ教授の『具格』に言及し、この本がいかに優れているかということを話された。そして「あなたはノビサド学派（イビッチ教授夫妻が中心となる構造言語学の一派）のピペル教授のお弟子さんだから、この本のことは当然ご存知ですね」と聞かれた。その日大学の宿舎に帰り、自分の本棚から『具格』を出してみて、2004 年は丁度出版 50 周年であることに気がついた。この本は名著でありながら、古書店でもなかなか手に入らない稀観本になっていることは知ってい

たから、すぐにピペル教授に連絡をとり、50 周年の記念研究会などのイベント、そして具体的な復刊の仕方とその可能性についてご提案をした。すると、ピペル教授は丁度同じ日にほぼ同じことを考えていたと大いに喜ばれ、諸手を挙げて私の提案に賛同してくださった。その後、ベオグラードに移った私は、ピペル教授と計画を進め、2005 年秋、セルビア語研究所所長（当時）ソフィヤ・ミロラドビッチ教授の序文を加え、晴れて名著は再び世に出た。その序文には、この一連の計画の中心メンバーとして、ピペル教授と並んで私の名前が書かれている。これは、望外の名誉であった。

復刊されたのは、ベオグラードの本の博覧会初日であった。その日の夕方、私は博覧会場を訪れ、出たばかりの『具格』2 冊を出版社から受け取り、すぐにノビサドに向かった。翌日ノビサドで国際スラヴィスト会議文法研究委員会主催の大規模な会議が開催され、そこではセルビアの研究書が展示されることにもなっていたからである。

ロシアや欧米の名だたるスラブ語学者が、セルビアの文化研究機関マティツァ・スルプスカの記念ホールに列席した。イビッチ教授は名誉組織委員として参加され、基調講演をされた。尚、私は、第 2 部でセルビアのスラブ語研究者として報告を行った。

会議当日の早朝、ピペル教授に復刊された 2 冊をお渡しした。学会の組織委員長で、ご自分の発表もあり、多忙を極めていたにもかかわらず、ご自分の恩師の名著が、重要な国際会議で再び披露されるのに間に合ったことをお喜びになるピペル教授のお姿が印象的であった。ピペル教授は 2 冊のうち 1 冊を渡し「君の分は出版社から別に貰えるから、この 1 冊は東大図書館に納めなさい。」とおっしゃった。

こうして、私が北大の図書館で最初に出会った『具格』は、ロシア、ポーランド、セルビアという運命的な長い道のりを経て、現在は東大の図書館でも読めるようになったのである。

## ブルッキングスで考えたこと

**岩下明裕（センター）**

**「日ロ同盟」：シアトルの誓い？**
**（ロシアからの客員、ゲオルギー・トロラヤさんと）**

2007 年 9 月から 10 ヵ月間、米国ブルッキングス研究所の北東アジア研究センター（以下、CNAPS）の客員研究員としてワシントン DC に滞在した。実は私は 3 ヵ月以上続けて外国に滞在したことも、留学経験もない。80 年代後半のソ連留学プログラムもフルブライト奨学金も落ちに落ち続けていた私は、自分の人生で留学やら在外研究やらの機会が来ることはもうないと考えていた。私を（今回が最初の応募ではないとはいえ）客員に選んでくれた CNAPS 及び（苦しい台所にもかかわらず）送り出してくれたスラブ研にはお礼の言葉もない。

2007 年 8 月末、家族とともにワシントンに到着したとき、すさまじい暑さに驚いた。南九

ワシントンに飽きたら、メキシコ国境へ（サンディエゴ）

州育ちの私も長くなった札幌の快適な夏に馴れすぎていたらしい。身も心も消耗する2週間が始まった。CNAPSは研究室や保険などある程度の生活もみてくれるのだが、住居の契約、家具の手配（レンタル）、娘の学校登録、電話やインターネットなど生活のたちあげ、ホームドクター探しなど全て自分でやらねばならない（どこかのセンターの外国人研究員への至れり尽くせりとはえらい違いだ）。これが一筋縄では行かない。ようやく住居の契約後、家具を手配しようとすると約束を破って配送を来週に変更する（怒濤の交渉で配送料は無料にさせた）。学校の登録所で1年未満の住居契約では追加書類がいるといわれ別の役場に行かされた（電話では翌週末まで予約でいっぱいとけんもほろろ。実際には行くと行列もなく、おばさんがにこやかに10分で書類をくれた）、などなどなど書き出すとそれだけでエッセイが終わるほどの右往左往だ。もっとも深刻だったのは、医者と保険だったが、あまりに濃すぎてここにはかけない。大統領選挙でヘルスケアが最大の争点になる理由は暮らしてみないとなかなか実感しないだろう。

外国で暮らしたことはないとはいえ、ロシア、中国、インドなどユーラシアの社会をそれなりに経験している身から比較してみた。「中国は金か人間関係で御せるのでまだ簡単」「インドは超越しすぎて比較不能」「忍耐と待つことが特徴」、とすれば比較しうるのはロシアしかない。ただ一つの違いは、ロシア人と違い、米国人は自分がそれに対応できなくても「May I help you?」と笑顔を絶やさない（ロシアならば「私は知らない」で終わるだろう）。この笑顔こそ、米国とロシアの決定的な違いだ、というような話を、帰国前のCNAPS全体報告会（後述）で聴衆の前でしゃべったら、大いに受けた。

CNAPSとは10年前に設立され、以後、中湾港日韓露の6つの国と地域からジャーナリスト、研究者、実務家など10ヵ月招請して、米国の政策コミュニティとの連携のなかで発信と受信をしてもらい、米国と北東アジア地域の関係づくりに貢献しようとするものである。CNAPSの組織自体が、台湾専門家のセンター長リチャード・ブッシュとセンター長補佐、若干のロジ担当者の4名程度から構成されていることを考えれば、その活動のほとんどは客員研究員の招請とその活用といえる。実際、6人の研究員は到着するやいなや、秋にかけて自己紹介的なプレゼンテーション（いままでの研究ならばなんでも可）が義務づけられ、離任直前に要求される、（後に報告書に収録される）書き下ろしペーパーのプレゼンテーションとともにメイン活動だ。それ以外には、4月に全員でのフィールドトリップ（要は外のシンクタンクや研究機関との交流）と6月に全員が壇上にあがっての「自国の米国外交認識」についてのパネル（http://www.brookings.edu/events/2008/0603_cnaps.aspx）などが柱となる。教育プログラムも充実しており、ブルッキングスが実務家などに提供するセミナー「インサイド・ワシントン」（政策決定過程の内側を識者を呼んで連続講義し、議会へのロビー活動まで訓練を受ける）やら「米国外交・安全保障」（ギングリッジやクリストファー・ヒルなどに会える）を無料あるいは（200ドル程度の）超ディスカウントで受けることができる。その他、毎週水曜日朝にコーヒーチャットと称して雑談の場が設けられる。CNAPS以外のセンターがブルッキングスの内外で組織する様々な催しへの参加も奨励される。

所長がタルボットということもあり、期待もあったのだが、（中東や中国研究のパフォーマンスに比べて）所内のロシア研究は弱く、私自身はケナン研究所とジョージタウン大学でロシアや中央アジアもの、となりのジョン・ホプキンス大学で中央アジアや南アジアもの、CSIS で戦略ものといったように、外のシンクタンクのセミナーによく出かけた。セミナーがお昼にかかると食べ物がサーブされるのも魅力的だ（ただし、たいていまずいサンドイッチ。コーヒーはスターバックスで美味しいが）。

私が滞在中に意識したのは、1）上海協力機構を無視するか敵視する傾向が強い政策コミュニティへの提言と 2）北方領土問題や日ロ関係に関する米国の後押しをとりつけることの 2 点であった。前者はケナン研究所や VOA を通じて発信し、2007 年 7 月に笹川と共催で行ったシンポの成果（『上海協力機構：日米欧とのパートナーシップは可能か』）で「ロビーイング」をかけたせいもあり、多少の効果があったように思う。他方で、後者は CSIS やアメリカン大学などで報告し、国務省関係者と議論を重ねたとはいえ、ワシントンがいま日本にもロシアにも関心を失っている状況では広がりのある理解を得られたとはいえない。上海が関心をもたれ、日ロに誰も振り向かない。その鍵の一つはワシントンの政策コミュニティが中国問題に熱中しているからである（北朝鮮ではない、念のため）。

中国は東アジアを議論するコミュニティの圧倒的なテーマである。私はそこで一生懸命に日本とロシアの関与の意味をとき続けたが、日米の認識ギャップに衝撃をうけた。ワシントンの政策コミュニティは、東アジアを基本的に米国と中国と日本の三角形で考える。日中が対米同盟を結ぶシナリオがないとすれば、米国が（問題の対象となりうる）中国と直接、マネージするか（民主党）、日本との同盟を梃子にプレッシャーをかけるか（共和党）選択肢は 2 つしかない。そこから民主党が政権をとると日本がまたクリントン時代のようにパッシングされるという理解が生まれるのだが、これは誤解である。民主党ブレーンには 2 ヵ国間ではなく多国間協力を構想する人たちが多く、中国のみを論じていても日本を忘れているわけではない。民主党に近いブルッキングスにおいても、中国のことしか公けで語らない人たちも日米同盟を前提に考えており、内心はかなり日本に友好的だ（わがセンター長のリチャードなどもその一人だ）。むしろ、彼らは日中関係が悪化して、米国の負担が増えることの方を心配している。だが問題はその先にある。実は多くのワシントニアンは、「日本は中国が怖くて怖くて仕方がない。だから米国に日米同盟の強化をお願いしているのだ」と考えている。日本の中国とのつきあい方や日本外交の方向をきちんとおさえれば、この種の理解は表層的なはずだ。では、どうしてこのようなことが起こるのか？　日本から「中国脅威」のメッセージを一面的にロビーする人たちがいるからだ。彼らは米国の弱さを熟知している米国専門家でもなく、中国の問題点を知り尽くしている中国専門家でもない。その多くは、ただワシントンにパイプをもち、戦略・政策通として食い込んでいるだけだ。ワシントンで驚いたことの一つ。日本ではあまり知られていない人たちの議論がひとかどの専門家のように数多く流通している。日米関係の問題点のひとつはおそらくこれだろう。

だが米国側にも理由がある。この日本からの声に照応するワシントンの東アジア・コミュニティの狭さである。ワシントンは通常、ユーラシア大陸を中心に置いて、米国を西に日本を東に置いた地図で世界を考える。だがユーラシアを通じて日米関係が交錯することはない。ワシントンから順次エリアを設定すると、ロシアはヨーロッパの延長にはいる。東アジアや北東アジアのなかでロシアが入るのは稀だ（ギル・ロズマンの存在や CNAPS がアジアに詳しいロシア人を客員に呼んでいるのはあくまで例外。ブルッキングスでもロシア問題はヨーロッパ・セクション）。中国、朝鮮半島、日本など極東はいわば果てのエリアとなる。では日米同盟はどうなのか。これは、いわばワシントンから西海岸を経て、この世界地図では表現されていない太平洋を通じて、裏側から延びるベクトルであり、その対象はせいぜい中国で

終わる。日米同盟を世界にというCSISや共和党の一部の発想も、所詮、このベクトルを軍事的意味合いをもたせてインド洋側にひっぱろうとするものに過ぎない。マイケル・グリーンが論じる日米関係は俊逸であっても、彼の東アジアを越えた日本外交に対する理解は議論の余地が多い（彼が論じる日本の対ロシア外交や対中央アジア外交を読むと悲しくなる。例えば、*Japan's Reluctant Realism* をみよ）。いずれにせよ、ヨーロッパや中東など地図の表側を通じて米国と日本のベクトルが交わる発想はワシントンの政策コミュニティにはほとんどない。だからこそ、彼らは日本外交がそれなりの存在感を示している、ヨーロッパ（とくに中東欧）、中東（とくにイラン）、南アジア（インドにもパキスタンにも）、中央アジア、東南アジアなどへの貢献が視野の外から抜け落ちる。結局、彼らの認識の狭量と日本の「ロビー」とが結びつき、日本外交があたかも中国の一挙一動に左右されているかのような言説を再生産させている。

これに対する私の処方箋は、日本外交の広がりと蓄積をワシントン全体に伝えるフォーマットを作り、強化することである。要は、米国の日本学者とだけ「愛」を語り合う「日米専門家対話」ではなく、（私たちがあまりおつきあいしておらず、日本を知らない）世界各地をカバーする米国人専門家と（彼らが知らないが、日本ではトップクラスの）世界に対する知見をもった日本人専門家が互いの存在を認識し、対話をすることだ。この種の日米「交流戦」を組織することが、新しい日米関係の方向性をつくるために緊急に必要なことだと思う。ブルッキングスにいたことで、ワシントンでつちかったネットワークを梃子に今後、そのような仕事を私は手がけていきたい。「中国が怖いからワシントンに泣きつく日本」。このイメージの延長線上で「日本をもっと大事にして」と「知日派」にロビーを重ねてもあまり効果はなかろう。日本は米国との関係を強化するためにも、まず隣国との関係を安定し発展させなければならない。隣国との関係強化には国境問題を建設的な方法で解決する必要もある。そして、韓国と同盟を結び、ロシアと協力し、中国との関係を調整する。そのプロセスを通じて日本はみずからが地域秩序を創出する主体として、ユーラシアに対する日本の外交アセットを米国に伝えれば、日米関係は新たな展望を見いだせよう。結果として、日本は米国の政策コミュニティでより大きな尊敬と信頼を勝ち取れるに違いない。

## 極東地域における若手研究者たちの交流

**加藤美保子（北海道大学・院）**

2008年5月12日から15日にかけて、ウラジオストクにあるロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所（以下、研究所）で若手研究者のための国際会議「変容する世界のなかのロシア極東とアジア太平洋諸国」が開催された。これまで同研究所は2年に1度の頻度で若手研究者のための研究会を企画してきたが、国際会議は今回が初めての試みだそうだ[(1)]。会議の目的はロシア極東、ザバイカル、シベリア地域および近隣諸国で人文・社会科学を専門とする35歳以下の若手研究者・大学院生の学術交流、意見交換である。今回の報告者数は約60人、ロシア以外からの参加者は約15名であった。ロシア側の参加者は地元ウラジオストクの諸研究機関のほかにも、ウスリースク、ハバロフスク、コムソモルスク・ナ・アムーレ、ブラゴヴェシチェンスク、イルクーツク、ノヴォシビルスク、オリョール、モスクワ（2名）など様々な地域から来ていた。中国側は北京の中国社会科学院から1名、そし

1 2007年4月にも「現代世界におけるロシアと中国」というテーマで同様の会議が行われ、北海道大学の大学院生らも参加した。しかしそれは「ロシアにおける中国年」関連のイベントとして行われたものであり、「若手会議」を国際会議にしたのは今回が初めてである。

会議のようす

て黒龍江省、吉林省、遼寧省の社会科学院からそれぞれ数名ずつ参加していた。日本からの報告者は北海道大学文学研究科博士課程で学ぶ4人と、モスクワの外交アカデミーで留学中の筆者の5人であった。3ヵ国とも中央からの参加者は非常に少ない。ロシア極東、中国東北三省、北海道の学術交流といっても過言ではない。

筆者はこれが初めてのウラジオストク滞在だったので、楽しみな反面、宿泊施設や交通の面で不安を抱えながら現地へ向かったが、すぐそんな気持は吹き飛んだ。空港では今回の会議の実行委員を務めたユーリー・ラトゥシュコさんとイヴァン・スタブロフさんが出迎えてくださり、同じ便でモスクワから来た参加者と4人でホテル「マリャーク」へ向かった。中心地までの長い道のりをタクシーで進んでいくと、だんだん空気に潮の香りを感じるようになる。日本海の側で育った筆者にとっては、何よりもその空気と、海の見える景色がモスクワ生活の疲れを癒してくれるように感じられ、一目でこの街に好感を覚えた。

正午前に到着したので時間をもてあました筆者をスタブロフさんらが海岸通りの散歩に誘ってくださり、ついでに地図など買って今後の予定をたてながら札幌からの友人たちの到着を待った。モスクワからウラジオストクまでは飛行機で9時間、時差はプラス7時間である。モスクワ－ウラジオストク間の往復チケットは2万5千ルーブル、同じ条件でモスクワ－東京間のチケットを探すともっと安い。この航空運賃の高さが欧州部との交流の障壁になっていることは言うまでもない。中国、日本から来た参加者たちは口々に「近すぎて外国に来たという気がしない」と言っている。ウラジオストクは地理的にアジアの街のひとつなのだということを今更ながら実感した。

国際会議の初日は研究所から離れた建物にある講堂で開会式が行われ、ラーリン所長、ロシア外務省ウラジオストク代表、在ウラジオストク日本国総領事からの挨拶があった。次いで5人の先生方からの基調報告が行われた。テーマは「21世紀の日中間ゲームにおける太平洋のロシア」「歴史学と数学」「語り継がれてきたポリネシアの民話と神話」など、多岐にわたる興味深い内容であった。その後参加者全員で近くのカフェに移動し、サラダ、ボルシチ、牛肉料理の昼食をとりながら歓談し、報告前の緊張をほぐす。昼食は3日間とも研究所が予約してくれたカフェでロシア料理を楽しんだが、なかなか美味しかった。

オーガナイザーとして活躍した若手研究員の方々

参加者たちの報告は1日目と2日目の午後と3日目の午前中に5つのセッションに分かれて行われ

た。セッションのテーマはそれぞれ「アジア太平洋諸国の国際関係・国内政治の諸問題」、「ロシア極東およびアジア太平洋諸国の民族社会」、「極東の考古学と古生態学の諸問題」、「ロシアの歴史的発展過程における極東の役割」、「人文・社会科学の理論的諸問題」であった。それぞれのセッションに10人から20人の報告者があり、報告時間10分、質疑応答5分で次々に報告が行われていく。筆者は「ロシアとAPEC: アジア太平洋地域統合へのロシアの参加と国内的問題」というテーマで第1セッションの5番目に報告させてもらった。セッションが終わった後にも「日本は2012年のウラジオストクAPECの準備を手伝う用意がありますか？」という質問を受ける。モスクワの関係者が「あと4年以上ある」と余裕に構えている一方で、地元の人々は一向に進まない開発に不安を感じ、経験豊かな近隣諸国の助けを望んでいるようだ。

**集合写真　最終日のエクスカーションで撮影**

筆者が参加した第一セッションでは上海協力機構、北東アジアのエネルギー協力などの地域協力に関する報告のほか、中国の発展戦略の変化、中国・ニュージーランドの経済関係、中国の民族政策など現代中国の政治経済への関心の高さをうかがわせる研究が多かった。また変わったところでは日本の社会問題として、「ひきこもり」と「いじめ」に関する調査を報告したロシアの院生もいた。会議での使用言語はロシア語とされていたが、中国からの報告者が質疑応答で中国語を使ったのをきっかけに、質疑応答では中国語を使ってもよいという暗黙の了解ができた。それというのも研究所の院生・研究員の多くが中国語を学んでおり、発言者の近くに座っている学生が通訳を買って出てくれるのである。以前大阪で中国のインパクトと東アジア国際秩序をテーマとした研究会に参加したときにも感じたが、近い将来この分野では中国語が共通言語になるのかもしれない。セッションを通じて質疑応答は盛り上がっていたが、言語の問題もあってか日本からの参加者の発言は少なかったように思う。この点は自分も含めて反省しているが、次回はぜひ日本からの参加者を増やして存在感を発揮したいものである。早い段階で研究対象の現地を訪れ、資料だけでなく人と土地を見ること、自分の勉強してきたことが現地の研究者にどう受けとめられるか試してみることはモチベーションを高め新たな視点の発見へつながるだろう。

今回の会議は報告者の募集から会議の運営、セッションの司会、エクスカーションまですべて研究所の院生とカンディダートの学位をとったばかりの研究員たちが取り仕切っていた。先生たちはセッションを聞きに来てたまに質問を投げかける程度である。報告内容に深みがなく、学会のように専門の議論をする場というよりは「ゼミを大きくしたもの」という評価は否めないが、今後時間をかけて若手研究者の意見交換、学術交流の場として定着させ、発展させていくことを願いたい。

最終日には閉会式のあと、研究所からバスで北に二時間強のところにあるシュコトフスキー地区へエクスカーションに出かけた。この日も一日中日差しが強く暖かかったが、会議のあった一週間はずっと天気に恵まれた。12～13世紀に築かれたという史跡を訪ね、要塞であったと言われる小高い丘に登ってみると、今はもう私有地になっており、トラクターで畑を耕すおじさんに「勝手に入ってくるな！」と怒鳴られ全員で退散。その後バスで近くの川へ行き、

川原で火を起こしてお昼ご飯の準備をした。ロシア人は皆焚き火をおこす手際が良い。ひそかにバーベキューを期待していたが、お湯をわかして即席マッシュポテト、カップラーメン（ここら辺がロシアらしい）、パン、野菜、フルーツ、お菓子で夕方までワインとビールを（なぜかウォッカ抜き）楽しんだ。盛り上がってくると皆、中国語で歓談しはじめる。実はこの中で中国語を話せないのはほんの数人なのだ。聞いてみると、参加したロシア人のほとんどは、中国で語学研修を受けた経験をもっている。やっとロシア語になれてきたのに次は中国語か・・・と頭を抱える筆者であった。

なにはともあれ、とても刺激的な 4 日間を過ごすことができた。ひとつ気になったのは、韓国からの参加者がいなかったことだ。この会議は主催した研究所と中国東北部の研究機関のコネクションがベースになっていると思われるが、このような試みに日本の研究機関も積極的に参加し、日本にも会議を招致し、北東アジアの学術交流の層を厚くしていけたらいいと感じた。

# 学　界　短　信

## ◆　比較経済体制学会第 48 回全国大会開かれる　◆

比較経済体制学会の今年の全国大会が 5 月 31 日～ 6 月 1 日に高崎経済大学で開催された。今年の大会では、「体制比較の多様なアプローチ」と「成長と雇用：多様なアプローチ」の二つが共通論題とされた。共通論題「体制比較の多様なアプローチ」では、大会プログラム委員長の上垣彰氏（西南学院大）が経済学の立場からの体制比較の意義を述べたのに加えて、歴史学、政治学、社会学の立場から、会員外の松井康浩（九州大）、林忠行（北大）、五十嵐徳子（天理大）の各氏がそれぞれの学問分野における体制比較研究の成果の一端を報告した。「成長と雇用」の共通論題では、ロシア、中国、インドの三国比較が意図され、石川健（島根大）、丸川知雄（東京大）、佐藤隆広（神戸大）の各氏がそれぞれの国の問題状況について報告した。いずれの共通論題においても、比較することの有効性があらためて示されたように思われた。このほかに、自由論題報告が計 7 本あった。

今年の秋期大会は 10 月 18 日（土）に横浜国立大学で開かれ、来年の全国大会は国学院大学で開催される予定である。［田畑］

## ◆　スロヴェニア言語・文化シンポジウム　◆
## 「スロヴェニア語文学の父プリモシュ・トゥルーバルの生誕 500 周年およびスロヴェニアの EU 議長国を記念して」

6 月 21 日（土）、東京大学駒場キャンパスにて上記シンポジウムが開催された。日本でのスロヴェニア関係のシンポジウムは、2000 年に開催されたフランツ・プレシェレン生誕 200 年記念シンポジウム以来、2 回目である。今回のシンポジウムを組織されたのは、前回同様、柴宜弘氏（東京大）、山本真司氏（東京外国語大）及びイェリサヴァ・ドボウシェク=セスナ氏（東京外国語大）である。

まだ日本人にあまり知られていない小国スロヴェニア、しかもさらに馴染みのないトゥルーバル（しかしスラヴィストには馴染みある名である）の記念ということもあり、参加者は発表者 10 人、聴衆 40 人前後と比較的少数ではあったが、日本人研究者とスロヴェニア人研究

者各5名による熱のこもった発表、旧ユーゴスラヴィアや他の東欧諸国に関心を持つ聴衆も参加した質疑応答が活発におこなわれた。尚、会場には旧ユーゴスラヴィアを代表する歌手ヤドランカさんの姿もあった。

研究発表のようす

研究発表は3部から構成されていた。第1部のテーマはトゥルーバルを巡る歴史と言語の問題が中心となり、他に日本の隠れキリシタンとスロヴェニア人プロテスタントの比較研究、スロヴェニア語と日本語の文語形成史の諸問題についての報告があった。第2部は、日本におけるスロヴェニア語教育史とその現状、スロヴェニア言語学史、スロヴェニアと俳句、新スロヴェニア芸術運動について発表された。第3部はスロヴェニアとEUの歴史と現状についての議論がなされた。研究発表の後は、柴氏を中心にしたパネルディスカッションでシンポジウムは締めくくられた（当日のプログラムはhttp://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/j/d_080621.htmlを参照されたい）。

上述の発表テーマからもわかるように、このシンポジウムは多様な研究分野で活躍する研究者が「スロヴェニア」という共通テーマで会し、お互いの知識と親交を深める貴重な機会であった。また、駐日スロヴェニア大使もシンポジウムに出席され、柴氏からは東京大学とリュブリャナ大学の学術協定締結が報告されるなど、日本とスロヴェニアの友好にとっても実に意義深い1日となった。

余談ではあるが、組織者の一人であるセスナ先生は、私が駒場の学生だったときに、初めてスロヴェニア語の手ほどきをして下さった方である。先生は今回のご発表の中で私のことを何回か言及され、また私の発表の時には、自分の教え子として会場に紹介して下さった。シンポジウム後には「これからもスロヴェニア語を続けるように」とトゥルーバルの本を渡された。学生の時分にはセスナ先生とシンポジウムでご一緒する日が来るとは夢にも思わなかったが、出来の悪い教え子ほど先生の記憶に残り、また可愛がられるものだということを実感した日であった。［野町］

## ◆　学会カレンダー　◆

2008年

9月27-28日　北東アジア学会第14回学術研究大会　於山形大
10月11-12日　ロシア史研究会年次大会　於愛知県立大
日本ロシア文学会第58回定例総会・研究発表会　於中京大
10月11-13日　ロシア・東欧学会／JSSEES　2008年度合同大会　於名古屋学院大
10月12日　4学会共同シンポジウム・共同懇親会
10月18日　比較経済体制学会第7回秋期大会　於横浜国立大
11月20-23日　米国スラブ研究促進学会（AAASS）年次大会　於フィラデルフィア
2009年　3月5-6日　スラブ研究センター冬期国際シンポジウム
2010年7月26-31日　ICCEES（中東欧研究国際学会）第8回世界会議　於ストックホルム

センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。［大須賀］

# 図書室だより

## ◆ 改修工事中の移転について ◆

耐震改修工事の期間、図書室は、文系共用棟（バックアップ施設）という名の、法学研究科、経済学研究科の事務棟のすぐ西側につくられたプレハブの１階、1-1 室に移転することとなり、7 月 14 日（月）より一時閉室しておりましたが、8 月 6 日（水）からサービスを再開しましたのでお知らせします。

なお、仮住まい中は、スペースの関係上、新刊の新聞は開架できず、雑誌についても、ごく一部しか開架できません。また、参考図書類も、ごく一部しか利用できません。閉架資料についても、地図やシェヴェロフ・コレクションなど、一部、利用できないものがあります。また、和書、学位論文等は、これを機会に附属図書館に移動することとなり、6 月以降、作業を進めているところです。

以上のようなことで、しばらくご不便をかけることになりますが、よろしくお願いいたします。［兎内］

## ◆ 開館時間の変更について ◆

センター図書室は、９月１日より、内規を一部改正して、開館時間を変更することになりました。新しい開館時間は平日の午前９時から午後の５時までで、昼休みがなくなります。［兎内］

# ウェブサイト情報

2008 年 5 ～ 7 月までの 3 ヵ月間における、センターのホームページへのアクセス数（但し、gif、jpg、png 等の画像形式ファイルを除く）の統計です。［山下］

| | 全アクセス数（１日平均） | うち、邦語表紙アクセス数（１日平均） | うち、英語表紙アクセス数（１日平均） | 国内からのアクセス数（%） | 国外からのアクセス数（%） | 不明（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 月 | 441,647 (14,247) | 14,125 (456) | 2,423 (78) | 114,071 (26%) | 263,531 (60%) | 64,045 (14%) |
| 6 月 | 381,961 (12,732) | 13,267 (442) | 2,540 (85) | 104,038 (27%) | 221,020 (58%) | 56,903 (15%) |
| 7 月 | 411,750 (13,282) | 12,055 (289) | 2,498 (81) | 114,621 (28%) | 231,710 (56%) | 65,419 (16%) |

# 編集室だより

## ◆ スラヴ研究 ◆

『スラヴ研究』第 56 号（2009 年春刊行予定）の原稿締切は 8 月末です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。投稿規程等のハードコピーが必要な方は大須賀までご連絡ください。

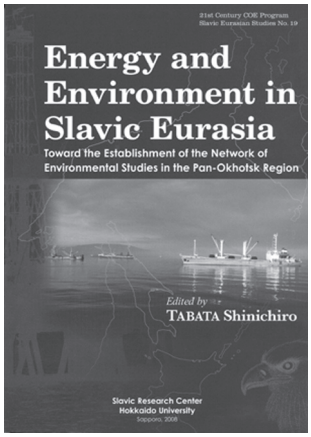
当誌ではスラブ・ユーラシア研究に携わる幅広い分野・年齢層の執筆者の投稿を歓迎して

います。なお、投稿規程に書かれている「120 枚」は大きなテーマの論文のための最上限であり、一般的には標準枚数である 80 枚程度の論文の方が好ましいので、ご留意ください。［宇山］

## ◆ Slavic Eurasian Studies No. 19 ◆

## *Energy and Environment in Slavic Eurasia: Toward the Establishment of the Network of Environmental Studies in the Pan-Okhotsk Region* の刊行

SES シリーズ第 19 巻 *Energy and Environment in Slavic Eurasia: Toward the Establishment of the Network of Environmental Studies in the Pan-Okhotsk Region* が 7 月初めに発行されました。2007 年 7 月の夏期国際シンポジウムにおける環境問題に関わる成果を基にしたもので，北大低温科学研究所，北見工業大未利用エネルギー研究センターとの共同で，昨年度開始された特別教育研究経費（連携融合事業）プロジェクト「環オホーツク環境研究ネットワークの構築」の最初の成果の一つと位置づけられるものです。同プロジェクトは 2011 年度まで 5 年間続けられますので，皆様からのコメントを歓迎します。極東のロシア人研究者 4 人の論文のほか，伊藤庄一（環日本海経済研究所），三寺史夫（北大低温科学研究所），森本幸裕（京都大），片山博文（桜美林大）の各氏らの論文など，英語，ロシア語，計 9 本の論文が収録されています。掲載論文は以下の通り。［田畑］




| | |
|---|---|
| Ivan Arzamastsev | The Construction of the East Siberia - Pacific Ocean Oil Pipeline (in Russian) |
| Shoichi Itoh | Russia's Energy Diplomacy toward the Asia-Pacific: Is Moscow's Ambition Dashed? |
| Grigory Tkachenko | Estimation and Development of Oil-gas Resources in the Okhotsk Sea Basin and Sustainable Development in Northeast Asia |
| Sergey Maslennikov | Marine Biological Resources along the Far Eastern Coast: Their Rational Use from the Ecological and Economic Viewpoints (in Russian) |
| Victor Kryukov | Possibility of Sustainable Development of the Basin of Amur River from Ecological Viewpoints (in Russian) |
| Humio Mitsudera | Environmental Problems in the Pan Okhotsk Region |
| Yukihiro Morimoto, Masahiro Horikawa, and Yosihiro Natuhara | Habitat Analysis of Pelicans as an Indicator of Integrity of the Arid Ecosystems of Central Asia |
| Hirofumi Katayama | Ecological Modernization in Northeast Asia |
| Nobuo Arai | On the Concept of the Project "Possibility of the Sustainable Development of the Pan-Okhotsk Region" (in Russian) |

## ◆ スラブ・ユーラシア叢書第 3 巻の刊行 ◆

スラブ･ユーラシア叢書の第 3 巻『石油・ガスとロシア経済』（田畑伸一郎編・北海道大学出版会）が 5 月に発行されました。空前の油価高騰のもとにあるロシア経済が、石油・ガスにどのように関係しているのかを様々な角度から明らかにしようとしたものです。内容は以下の通りです。ご一読いただければ幸いです。［田畑］

**目次**

**第 1 部　ロシアの石油・ガス産業**

第 1 章　生産と流通　　本村真澄

第 2 章　石油企業　　小森吾一

第 3 章　ガスプロム　塩原俊彦
**第 2 部　石油・ガスのロシア経済への影響**
第 4 章　経済の石油・ガスへの依存　田畑伸一郎
第 5 章　石油・ガス産業の利潤と資本　久保庭真彰
第 6 章　石油ブームの経済への影響　中村靖
第 7 章　ロシアからの資本逃避　上垣彰
第 8 章　石油・ガス企業と銀行　大野成樹
**第 3 部　石油・ガスとロシアの対外経済関係**
第 9 章　ロシアの WTO 加盟問題　金野雄五
第 10 章　南コーカサス三国とロシア　廣瀬陽子
第 11 章　ウクライナとロシア　藤森信吉

# 会　議（2008 年 5 ～ 7 月）

## ◆　センター運営委員会　◆

**2008 年度第 1 回　6 月 27 日**

**議題**
1. 北海道大学スラブ研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程（案）について
2. スラブ研究センターの研究活動及び運営について
3. その他

## ◆　センター協議員会　◆

**2008 年度第 2 回　6 月 9 日**

**議題**
1. 北海道大学スラブ研究センター長の人事について
2. その他

**2008 年度第 3 回　6 月 12 日**

**議題**
1. 北海道大学スラブ研究センター長候補者の選考について
2. その他

**2008 年度第 4 回　7 月 15 日**

**議題**
1. 特任教員（旧外国人研究員）候補者の選考について
2. 2007 年度支出予算決算について
3. 2008 年度支出予算配当（案）について
4. 教員の兼業について
5. その他

# みせらねあ

## ◆　人物往来　◆

ニュース 113 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。［松里／大須賀］

5 月 26 日　F. アリアス=キング（Fredo Arias-King）（『デモクラチザーツィヤ』誌、米国）

6 月25-28 日 陈兼（Chen, Jian）（コーネル大、米国）、チャイル（Chhair, Sokty）（神戸大 / カンボジア）、エデレ（Mark Edele）（西オーストラリア大）、エカート（Elzbieta Ekiert）（ハーバード大、米国）、エカート（Grzegorz Ekiert）（ハーバード大、米国）、ゴレンバーグ（Dmitry Gorenburg）（ハーバード大、米国）、ハ（Ha, Yongchool）（ソウル国立大、韓国）、ハン（Han, Sungjoo）（元大韓民国外務大臣、前駐米大使）、ハーシュバーグ（James Hershberg）（ジョージ・ワシントン大、米国）、カン（Kang, Guiwon）、キム（Kim, Hakjoon）（東亜日報、韓国）、クレイマー（Mark Kramer）（ハーバード大、米国）、マ（Ma, Sangyoon）（韓国カトリック大）、マクドウガル（Debra McDougall）（西オーストラリア大 ）、牛军（Niu, Jun）（北京大、中国）、パーソン（James Person）（ウッドロー・ウィルソン・センター、米国）、ラドチェンコ（Sergey Radchenko）（ロンドン大 LSE 校、英国）、沈志华（Shen, Zhihua）（華東師範大、中国）、スタインホフ（Debbie Steinhoff）（カリフォルニア大サンタ・バーバラ校、米国）、スティフラー（Douglas Stiffler）（ジュニアタ大、米国）、ターロウ（Lisbeth Tarlow）（ハーバード大、米国）、ウェスタッド（Odd Arne Westad）（ロンドン大 LSE 校、英国）、ウ（Woo, Seongji）（キョンヒ大、韓国）、ヤン（Yang, Jingxia）（ジュニアタ大、米国）、ズボック（Vladislav Zubok）（テンプル大、米国）、浅野豊美（中京大）、石川健（島根大）、泉川泰博（神戸女学院大）、井上正也（神戸大・院）、岩田賢司（広島大）、上垣彰（西南学院大）、大城肇（琉球大）、大津定美（大阪産業大）、尾高煌之助（一橋大）、金成浩（琉球大）、木村汎（拓殖大）、木村崇（京都大名誉教授）、久保庭真彰（一橋大）、黒岩幸子（岩手県立大）、佐藤由紀（早稲田大・院）、塩谷昌史（東北大）、下斗米伸夫（法政大）、鈴木博信（桃山学院大名誉教授）、栖原学（日本大）、仙石学（西南学院大）、田村慶子（北九州市立大）、等松春夫（玉川大）、外川継男（上智大名誉教授）、長嶋俊介（鹿児島大）、中村靖（横浜国立大）、沼野充義（東京大）、袴田茂樹（青山学院大）、長谷川毅（カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校、米国）、平田武（東北大）、古川浩司（中京大）、益尾知佐子（早稲田大）、村上友章（大阪大）、山上博信（愛知工業大）、山口昭和（防衛研究所）、山添博史（防衛研究所）、山田吉彦（東海大）、横手慎二（慶応大）、吉田修（広島大）、和田春樹（東京大名誉教授）

7 月 26 日 岩本和久（稚内北星学園大）、小椋彩（早稲田大）、外川継男（上智大名誉教授）、菱川邦俊（創価大）

## ◆ 研究員消息 ◆

ウルフ、ディビッド研究員は 4 月 1 ～ 7 日の間、スタンフォード大学フーバー史料館にて資料収集及びカリフォルニア大学サンタバーバラ大学サンタバーバラ校での研究発表のため、米国に出張。また、5 月 21 日～ 6 月 1 日の間、若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（ITP）プログラム紹介打合せのため、米国に出張。また、7 月 17 ～ 28 日の間、アバディン大学にてロシアと第一次世界大戦会議出席・発表及びロンドン英国国立資料館にて資料収集のため米国に出張。また、8 月 23 日～ 12 月 26 日の間、在外研究のため、米国に出張。

宇山智彦研究員は 5 月 9 ～ 25 日の間、カザフスタン南東部の開発史・環境史に関する史料収集及び研究打合せのため、カザフスタンに出張。

松里公孝研究員は 6 月 15 ～ 24 日の間、中央ロシア・東欧リサーチフォーラムにおいて講演及び西海岸セミナーにおいて講演のため、英国に出張。また、6 月 26 日～ 7 月 1 日の間、ICCEES 執行委員会出席のため、スウェーデンに出張。

兎内勇津流研究員は 7 月 28 日～ 8 月 1 日の間、科学研究費研究に関するセミナーでの報告及びウラジオストクの移民に関するフィールドワークの実施のためロシアに出張。

## ◆ 事務係長の交代 ◆

8 月 1 日付けで桒原元道前事務係長が経理課へ異動され、後任として留学生交流室より峯田学新事務係長が着任されました。桒原さん、今までどうもありがとうございました。峯田さん、よろしくお願い致します。［編集部］

# 2008 年 7 月 改修工事のため、仮住まいへ大移動しました

（図書室だより参照）

まず本や雑誌から

各階から集まった大量のゴミを仕分けするために雇われた学生たち

しばらくネットできません

引越し作業中もデスクから離れることができないほど多忙だった事務職員の方々

仮住まいとはいえ、8 ヵ月もいるんだから、念入りに整理しよう

エッセイ

英語論文執筆講習会に参加して（杉浦史和 p. 11）（平松潤奈 p. 12）（濱本真実 p. 13）（島田智子 p. 13）
野町素己　スラブと私を結ぶ運命の 1 冊 ..... p. 17
岩下明裕　ブルッキングスで考えたこと ..... p. 20
加藤美保子　極東地域における若手研究者たちの交流 ..... p. 23

2008 年 8 月 20 日発行
編集責任　大須賀みか
編集協力　田畑伸一郎
発行者　岩下明裕
発行所　北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/